

2010年(平成22年)3月7日

性同一性中1支援手探り

Q **ズーム**
性同一性障害
 身体と心の性別が一致せず、体に違和感を覚える障害。原因は明らかに

なっており、国内に1万人以上いるとされる。世界保健機関(WHO)の診断基準によると、①異性の一員として生き、受容されたいという願望がある②異性への性同一性が少なくとも2年間、持続的に存在する③精神障害の症状でなく、染色体異常に関連するものでもない④のすべてを満たすことが条件となる。

市教委「本、ネットで情報収集」

鹿児島市内の公立中学校に通う「性同一性障害」の1年生女子生徒(13)が、4月から男子生徒として通学することになった。県内では初めての事例だが、専門家は「悩んでいる児童や生徒は、想像以上に多い」と指摘する。国は今後の対応を探りがねており、教育現場はどうか支援すべきか、手探りの状態が続いている。

鹿児島市で県内初事例

「やっと本当の自分に近づける」
 鹿児島市内の中1生徒は声を弾ませた。物心ついたときから「女の子」としてみられることに違和感を覚え、常に「男に戻りたい」と思ってきた。学校は一番楽しい場所だが、女子として扱われる

国の指針手つかず

ことには抵抗があった。神経学会も医療対象としていないため、成母親は「この子がきもは人格が完全に形成つかけて、同じ悩みをさされていけないため、成持つ子が当たり前のようになり出せる社会にならたら」と願いを込める。

■潜在化
 性同一性障害は、世界保健機関(WHO)が診断基準を設ける医学的疾患で、日本精神

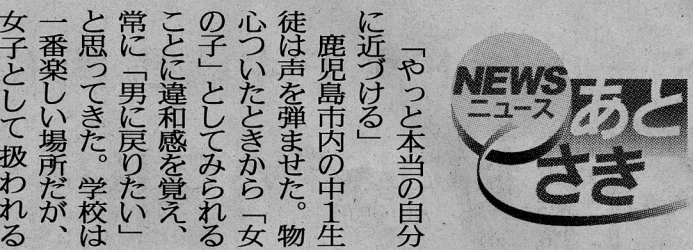
院長は「子どもの場合、生徒に接した経験を尋ねたところ、23・8%が「1〜2人いた」と回答した。中塚教授は「放って

おけば、登校拒否や自殺未遂など深刻な事態に陥る」と指摘。「悩みに言い出しやすい環境をつくるため、現場の教師が知識を持ち、受け止める姿勢が必要」と訴えた。

■要望書
 性同一性障害の児童、生徒への対応について文部科学省は「徐々問題が顕在化し始

め、法的制度などが必要な時期にきている」と話す。「悩みの確か」とする。だが、「どう取りかかれたいのかさえ分からない」というのが現状だ。実態把握も「本人が隠したい場合やプライバシーの問題があり、難しい」と説明す

る。今年2月、埼玉県内の性同一性障害の小学男児が昨年9月から女児として通学していることが明らかになった。それが個別対応して同県教委が県内約12校の公立小中、高は、事例を積み重ね、検証する体制づくりを急いでほしい」と訴えた。



通学や名簿の性別変更などを決めた。同市教委は「県内では専門医も見つからず、本やネットで情報収集するなど手探りの状態が続いている」と話す。「将来は実態調査も必要だろう」とする。性同一性障害をこの生徒を今後どう支援していくかで精いっぱい」と打ち明ける。は1月中旬、教育現場は1月中旬、教育現場における国の指針策定を求める要望書を文科省に提出した。山本蘭代表は「それが個別対応していては進まない。国が寄せられていたことが分かった。県教委は関係各課によるワーキンググループを設置、年度末には教育現場での対応の仕方などを定めるという。」